

## Ⅱ. アヴォラ, Avola へ

夜半を過ぎてめっきり冷たくなった風の香には、すでに晩秋の気配が感じられていた。車窓に移ろう静まり返った景色は、満月の青白い光の所為で、まるで雪景色の様。その雪景色の中を息をひそませてひた走る夜汽車の汽笛は、犬の遠吠えにも似て何や淋しい。夜の旅は嫌いだと、柄にもなく感傷的になった所で寝込んでしまったらしい。

ふと眼がさめた時、汽車はローマに近いオルテ、Orte という駅に止まっていた。(1975年9月21日の) 午前5時30分、フィレンツェを出てからすでに3時間が過ぎている。ナポリ、シチリア方面への帰省客でごったがえす車内、辛うじて見付けた通路わきの窮屈な補助席でも、結構、眠れるものである。予定で行けば、あと14時間でアヴォラに着くことになる。待望のアヴォラである。

イタリアに住みついて1年と6ヶ月、その間、私の心は常にシチリア島の南端、アヴォラに向いていたといっても過言ではない。そして、ようやくその時が来たのである。あと14時間、あと14時間でその私の夢が実現するのである。

夢——そう、それは実際、私のささやかな夢であった。かつて、ファルボが住んでいた町、アヴォラを訪れることが、ここ数年来の私の夢だったのである。ファルボ自身について種々調べなければならないこともあったし、知りたいこともあったが、本当のところを言えば、そんなことはどうでもよかった。唯、私は一目アヴォラの町を見ておきたかったのである。アヴォラの太陽と空気、そして土の匂いを、肌で感じる事ができればそれで満足であった。更に、かつてファルボも眺めたであろう地中海の彼方を、ワインを片手に眺める事ができれば、もうそれで私の夢は完全に実